

二〇二六年度

一般入試① 問題（国語）

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督かんとうくに知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

震災のあった年の五月。東北の大学に通う野球部の学生・康太郎は、被災し仮設住宅に住むマネージャー・真由美から頼まれ、浸水被害を受けたある民家におもむくことになった。

駅からバスに乗り、東側にバイパスを越えると、道沿いにはまだ、がれきが積みあげられていた。ひしゃげた車椅子や顔の破れたぬいぐるみ、扉のない冷蔵庫などが無造作に積まれ、放置されている。国道の手前でバスを降り、十分ほど歩いた場所にその家はあった。木造二階建ての、ごく普通の民家だ。一階は五十センチも浸水したようで、柱の色がくつきりと変わっていた。

真由美が誘ったのだろう、康太郎以外にも野球部の面々が集まっていた、みんな知り合いだった。このあたりのボランティア活動の取りまとめをしているという豊田と名乗る男性が指示を出し、学生が手分けして進めると、作業は二時間ほどで終わった。ふだん使わない筋肉を使ったから、みんな腰をさすっている。真由美は、家の柱や剥がした畳を雑巾で拭きあげていた。こうしてマメに被災地の復興支援活動に参加しているらしい。

作業が終わり、家を出ようとするころ、

「ボランティアさ、きてくれてどうもね」

と家主のおじさんに言われて、ようやく「そうか、これはボランティアだったのか」と気づいた。個人宅での作業で、手続きなどもなかったから『ボランティア』という意識がなかった。

腰の筋肉が突っばっていた。鈍い痛み。バケツを何度も持ちあげたからか、二の腕もだるかった。明日には、筋肉痛になっ

「岩崎くん、ありがとね」

バケツを庭の手洗い場で洗っていた真由美が、玄関に立つ康太郎に駆けよってきて言った。満面の笑みとともに。細められた目と、桃色の唇、そのあいだから見える八重歯に、心臓が跳ね、頭がいつぺんにのぼせた。濡れた手で、握手するよ

うに丁寧ていねいに、手を握にぎられる。顔が急激きゅうげきに赤くなつていくのが、自分でもわかつた。真由美のやわらかそうな頬ほおに一筋ひとすぢ、泥どろがついている。

「あの、またボランティアしたいんですけど」

2 気づくと、康太郎は玄関げんかんで家主と話をしていた豊田に向かつて叫さけんでいた。

「え？」

顔をあげた豊田は、暑くもないのに額あせに汗あせを浮かべていた。四十代前半だろうか。大柄おおがらというほど身体が大きくはないけれど、貫禄かんりくがあつた。

「ボランティアって、どうやったらできますか」

「岩崎くん、急にどうしたの」

康太郎の発言に、真由美が口をはさむ。

今日まで、康太郎は大学で募集ぼしゅうされているがれき処理ボランティアや、仮設住宅周辺のバザーボランティアに見向きもしなかつたのだから、当然の反応だろう。

「ボランティアって素晴らしいと思つてん」

康太郎は真顔で言つた。真由美の頬の泥ぬめを拭ぬぐつてやりたかつたけれど、いま真正面から顔を見たらきつとよからぬことをするといふ確信があつた。チューとか。不自然に顔を斜ななめに向けつづける康太郎の態度に気づいたふうもなく、

「ああ、ボランティアね。わかつた、わかつた。ほくは黨員のボランティアの取りまとめしちよるだけやけん、ボランティアセンターにつなぐ。この辺に住んどると？」

と、豊田は聞き慣れない方言で言つた。九州からきた共政党的職員で、自身も体を動かしながら、ボランティアをする黨員の名簿めいぼや派遣先はけんさきを管理しているらしい。

住所や所属している大学などを質問されるままに伝える。重かつた肩かたが、みるみるうちに軽くなつていく気がした。ふと空を見あげると、分厚い雲の切れ間から、光の筋が数本、地上に降り注いでいた。

「ボランテアには二種類いると思うの。腰痛くなれる人と、腰痛くなれない人」³

「なんやそれ」

「筋肉痛になれる人と、筋肉痛になれない人って言い換えてもいい。わたしはね、そう思うの」

「それは体質ちやうか？」

康太郎がツッコむと、真由美は「じゃあ、炊き出しでカレーを出すとき、ご飯だけずっとよそえる人と、ルーだけよそつて並んでる人に手渡さないと気が済まない人」とさらに例を増やしてくれた。

「もつとわからんわ」

真由美はボランテア先の生花店の店主が振る舞ってくれたカレーを頬張って、足をバタバタとさせた。生花店の二階は事務所になっていて、その一室をボランテアの休憩室として使わせてもらっていた。

ピンとこない康太郎に、真由美はスマホでSNSを開いて、いくつかの投稿を見せた。国会議員が『福島は放射能汚染さ
れてる』と揶揄する投稿や、洗濯もしていないような古着を詰めた段ボールの写真が添えられた『被災地に送ります』とい
うブログ記事。『原発から五十キロほど離れたところに実家がある夫から聞いたんです。近隣住民が鼻血を出してバタバ
タ倒れてるらしいって。テレビでは、ウソを言ってるって事ですよね?』という掲示板の投稿を転載した投稿。

ガラケー持ちで、SNSをしない康太郎はどの投稿もはじめて見た。「これは、エグいな」とどちらにもとれるような感
想を言う。真由美の顔を見ると、真由美は唇を一度噛みしめてから、スマホを乱暴な動作で机に伏せた。

「この人たちは、ボランテアに絶対こない」

「せやなあ」

「で、『がんばろう東北』みたいなハッシュタグを十個くらいつけて、毎日『被災者の方と今日はこんな話をしました!』つ
て書きこんでる人。こういう人は、くるけど、裏方の段ボール運ぶ仕事はイヤがるでしょ。それでもいいけどさ。ありがた
いと思わなきゃいけないんだろうけどさ。こういう人は、腰痛くなれないんだよ」

腰痛くなれる、の意味が少しわかって、康太郎は「ああ、せやな」と相槌を打った。けれど、それらの投稿をしている人
の気持ちも、どこかわかるような気がした。情報が錯綜して、デマか正しい情報か検証もされないまま、ただ日々は過ぎる。

「がんばろう東北」と歌いあげる歌手の出演する音楽番組と、「政府はなにが隠してるんじゃないか」とつばきを飛ばすコメンテーターの出演するワイドショー。放射能、セシウム、窃盗集団、停電、鼻血、人工地震。ランダムに流れてくる情報の、なにが正しくてなにが正しくないのか。どこが安全でどこが安全じゃないのか。いま自分はなにをすべきなのか、すべきでないのか。だれにもわからない。

康太郎は真由美のように怒れなかった。心の中だけで言い訳のように思う。

——おれはよそ者だから。

「はい、昼休み、おわり！」と真由美が立ちあがる。階段を下りていく真由美について、康太郎も一階に向かった。

店舗の裏口から表に回ると、外は日差しが強かった。生花店の表にはマリーゴールドの鉢がふたつ出されているきりで、店内にある鉢はどれも泥に汚れ、苗も引き抜かれているものが多かった。「津波で運ばれてったやつもあるし、残ったやつも水浸しになって、根腐れしちゃったから抜いたの」と店主の武井は説明した。丸い鼻に丸い眼鏡をかけ、パーマのかかったショートカットの似合う、小柄な女性だった。十坪ほどの店内を埋め尽くす鉢をひとつひとつ検分して、売り物であり育ててきた植物である花を抜いて捨てるのはやりきれないことだっただろうに、その口調はカラッとしていた。

植木鉢を洗剤の入ったたらいにつけて、ブラシで汚れを落とし、水ですすぐ。やること自体は簡単だったが、なにせ数が多い。流れ作業でやっても、すぐに腕がパンパンになった。雨の晴れ間らしい、じつとりとした陽光が差し、袖をまくつても汗が滲みでる。

夕方ごろ、ようやく作業を終え、帰り支度をしようかというとき、「買い出しに行くんだけど、ついてきてもらえませんか」と武井に乞われた。少し遠いスーパーで買い溜めするらしい。真由美は用事があるので、康太郎だけ車に乗りこんだ。

「ごめんね。お菓子買ってあげるから」

運転席に座る武井が冗談めかして言った。

「はは、やった。三百円までですか」

「小学生の遠足じゃないんだから。もっと買っていいよ、今日がんばってくれたでしょ」

車は荒地に挟まれた道路を走った。道路だけは補修され走ることができたが、周囲は荒れていた。実家からさらに北に行つたときに見た水田に似た風景だったが、ところどころに横倒しになった電柱や全壊した家屋の屋根が放置されているのが見えた。遠くに累々とがれきの山が積みあげられている。

道路の向こう、ひしゃげたガードレールといくつかの建物の奥に、海が見えた。

「あ、海っすね」

康太郎は思わず声をあげた。ハツとして、武井の顔を窺う。

6 「すみません、海つてあんまり見たことなくて」

「なんで謝るの。大学からこっち？」

「はい。三年目っすね。ふだん大学とアパートの周辺でしか生きてへんから、沿岸部にはなかなかこないんすよ。試合とか合宿とかの移動で通りかかってバスでは寝ちゃってますし。じっくり見るの、初かもです」

「初体験がコレかあ。じゃあ、ここから先も見ろ？」

武井はちらと康太郎の顔を見て、またまっすぐに前を向いた。栗色の髪の毛のあいだから、塞がっていないピアスホールが覗いていた。

「見ておいたほうがいいかもね、これからもボランティアするつもりなら」

車はさらに沿岸部に向かった。どこを見ても茶色い風景が広がっている。津波で押し流されたのだろう車、家屋、柱、家具、木々……。康太郎はいたたまれなくなり、武井のハンドルを持つ手を見つめた。細く、白い指の節があかぎれで割れていた。

車がスピードを緩めると、顔を上げると、海が先ほどよりも近い位置に見えた。松の木がまばらに残っている。地面にはがれきと、塀に使うような資材が区画を区切るように置かれていて、水田のように見えていたのは、かつて建物があった土地だったのだ、といまさらながら思った。

7 「ここ、町があつたんすか？」

武井は答えず、更地を見つめていた。夕日が顔を照らして、瞳が茶色く透けて見えた。

「すみません」

康太郎はシートの上で尻をずらして、シートベルトを両手で握った。

「おれ、ほんま無神経なことばっかり言ってるつすよね。すみません。わからへんくて。なんていうか……どんな態度取つたらいいのかも、なんて声かけていいのかも。なにをやってもけしからんって怒られそうやし、おれが怒られるくらいならまだええけど、ヒサイサノカタ……か、噛んだ、えーと、被災者の方を傷つけたら取り返しがつかへんから、怖くて」

この光景を見たら、なおさら。口の中だけで言つて、また無神経なことを言つたかと後悔した。

押し黙る康太郎に、武井は怒るわけでも、「いいよ」と言うわけでもなく、窓の外を指さした。更地のある一帯を指して、言う。

8 「あそこさは、理容室があつた。ばあさんがひとりやってる店だよ。お団子頭の、いつもカラー剤でエプロンが汚れてる。赤い口紅を引くのがこだわりで、絶対にすつぴんは見せないばあさん。あたしは一回だけ、すつぴん見たことあるんだ。小学生のとき、夕方に店に行つたら、扉は開いてるのに、ばあさんがいないことがあつて。昔の理容室だから髪を切るスペースの奥に壁一枚隔てて茶の間があつて、ばあさんはそこに住んでたんだ。あたしは親に千円渡されてるから帰るに帰れなくて、『おばさん、おばさん』って奥まで入つていつて呼ぶ。出てきやしない。耳が遠くなつてたんだな。『おばさん、おばさん』って茶の間にバツと顔出したら、ようやくばあさん気づいて、でも突然よそのうちの子が家に入つてきたらなんのイタズラかと思うわな、バツと茶投げられて」

「茶？」

「茶。熱湯で淹れた緑茶よ」

「えつ、ああ、茶……」

「手に思いつきりかかつてね。大騒ぎよ。最初は『どつから入ってきた！』って怒鳴つてたばあさんも、近所の常連さんの子どもだつて気づいたらあわてて。あのあと……母親が迎えにきたんだつたかなあ」

武井は左手の親指のつけ根をしきりになでた。そこだけ、皮膚にうすく膜が張つたようにふくらんでいた。

「あのときのばあさんの顔、傑作だったなあ。眉毛がないんだ。描くために剃つてるから、描かないとナイんだな。うん、

いい顔だった。いい顔。……だからさ、なんていうか。町はあつたんだよ」

静かな声だった。潮のにおいが鼻先をかすめた気がした。遠くから見ると灰色のコンクリートのようだった海が、橙色の光を帯びて、波打っていた。

康太郎は押し黙った。返す言葉をもっていなかった。自分の肘の内側に、乾いた泥がこびりついているのが見える。¹¹「あの、また困ったら、呼んでください」と絞りだすように言う。「腰は強いほうなので」

また、呼んでほしい。はじめてボランティアに参加したときより切実に、そう思った。

(上村裕香『ほくほくおいも党』)

問一 —— 線部1「身体は疲労を訴えているのに、それはまったく、嫌な感じじゃなかった」とあるが、このときの康太郎の様子を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家主のおじさんから直接感謝の言葉をかけられたことよって、自分の働きが被災者の力になったことを実感できたため、重労働による筋肉の張りや痛みも不快ではなくなっている。

イ 家主に感謝された自分の作業が、以前から参加したいと思っていたボランティアであったことに気づき、身体へのほどよい疲れも含めて、ボランティアの魅力にひきつけられている。

ウ 腰や腕に疲労が残ったものの、家主のおじさんに感謝されただけでなく、真由美のため必死に頑張る姿を彼女に見せることができたので、ボランティアも悪くないと思いはじめている。

エ 家主からの予想外のお礼に困惑しながらも、初めて被災者の役に立てたという達成感を得たことにより、これまでに経験したことのないような疲労すら気にならなくなっている。

問二——線部2「気づくと、康太郎は玄関で家主と話をしていた豊田に向かって叫んでいた」とあるが、このときの康太郎の様子を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア つらい肉体労働から解放されて、好意を寄せている真由美とも話せて気分が高ぶり、自分の思いを伝える声が無意識のうちに大きくなった。

イ 真由美に頼まれて何となくボランティアに参加したが、活動していく中でその意義を強く実感し、また参加したいという思いを大声で伝えた。

ウ ボランティア活動にやりがいを感じ、真由美から直接感謝の言葉をかけられたことによる心の高ぶりもあって、思わず大きな声で話しかけた。

エ 自分が働くことよって被災者や真由美を喜ばせることができると気づき、今後もボランティアに参加したいという思いを大声で宣言した。

問三——線部3「腰痛くなれない人」とあるが、それはどのような人のことを言っているのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「がんばろう」と声援を送りはするが、結局他人事としてしかとらえることができず実際に被災地を訪れない人。

イ ボランティアに参加することで人から感謝されたり注目されたりすることばかりに喜びを感じ、満足感を得ている人。

ウ 被災者と直接交流をすることはありますがボランティアの役割であると思ひこみ、他の仕事には見向きもしない人。

エ ボランティアには来るものの、自分のやりたいことを何よりも重視して被災者の声に耳を傾けようとはしない人。

問四 —— 線部4 「真由美は唇を一度噛みしめてから、スマホを乱暴な動作で机に伏せた」とあるが、このときの真由美の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大地震にまつわる不謹慎な投稿や被災地への思いやりに欠ける書き込みが、被災者をどれだけ傷つけているかということはいくら説明しても、当事者以外にはなかなか理解してもらえないことが悔しくてしかたがない。

イ 康太郎に見せるためとはいえ、今まで見ないようにしていた被災地に関する投稿を自分のスマホで検索した結果、被災者を茶化すような内容の投稿を目にすることになったので、腹立たしい気持ちになっている。

ウ 自分が生まれ育った故郷が大地震の被害にあつて多くの人々が苦しい思いをしているのに、被災地に対する根拠のない悪評や、被災者を傷つけるような投稿がSNSに次々と書き込まれることに憤りを感じている。

エ 大地震によってたくさんの人たちが避難生活を強いられている中、被災地を揶揄するような書き込みがSNSにあふれている現状に対するいらだちを、ボランティアに来てくれた康太郎に強く伝えたいと思っている。

問五 —— 線部5 「それらの投稿をしている人の気持ちも、どこかわかるような気がした」とあるが、康太郎は「それらの投稿」についてどのように捉えていると考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 当事者でない人が、メディアにあふれる真実かどうか分からない情報をどう受け止めてよいのか分からず、善意であつたとしても被災者からすれば首をかしげたくなくなるような行動をしてしまうことがあつてもおかしくない。

イ ボランティアに来る人が、いくら情報を得ても被災者の気持ちを心から理解して寄り添うことはできない中で、何とか被災者の役に立とうと「がんばろう東北」のような前向きなメッセージを送ることは理解できなくもない。

ウ 被災地の外からやつてくる人が、錯綜する情報を前にして何が正しいのか自分は何をするべきなのがわからなくなり、被災者のために働くよりも自分が目立つために働くようになってしまうことがあつてもしかたがない。

エ 当事者意識を持ってないよそ者が、日々ランダムに流れてくる大量の情報に触れているうちにデマを信じるようになってしまい、そのデマにまどわされて被災者を傷つけるような言動をしてしまったとしてもやむをえない。

問六 ——線部6「すんません、海ってあんまり見たことなくて」とあるが、康太郎が謝ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア その日初めて出会った武井に対して海を目にした瞬間しゅんかんついなれなれしい口調で話しかけてしまったから。
イ 海を見て思わずはしゃいでしまったことよって悲しみにくれる武井を不快にさせてしまったと思つたから。
ウ ボランティアに参加しているのに自分にこの海を見た経験がないことが武井を失望させたかもしれないから。
エ 津波による被害を思い出させてしまうような海という単語を武井に対して軽々しく口にしてしまったから。

問七 ——線部7「武井は答えず、更地を見つめていた」とあるが、このときの武井の様子を説明したのとして最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

- ア ここに町があつたかどうかなどという疑問は武井にとって考えたことがないことでどう答えて良いか分からず、またあらためて町の変わり果てた姿を目にしたことで、この町が失われてしまった事実を実感させられている。
イ ここに町がなかつたはずはないのに町はあつたのかなどという質問をされたことにいらだち、また紛れもなくここにあつた町に住んでいた人々のことを思い返すことで、人々の命を奪った災害への憎しみがよみがえってきている。
ウ 被災地のことを思いボランティアに来てくれる人々には感謝しなくてはならないと思うが、自分が生まれ育つた町が一瞬で消えてしまったことの悲しみやつらさは、そんな人々にも理解できないのだとあきらめの気持ちでいる。
エ 康太郎が気をつかって色々話題をふつてくることに対してはありがたく思うが、自分がかつて暮らしていた町が流され、後に更地になつた風景を前に感慨かんがいにふけている今は、できればそつとしておいてほしいと思つている。

問八 —— 線部8「あそごさは」とあるが、武井の言葉がここで方言になったのはどのような理由によるか。考えられる理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 康太郎が不安な気持ちを打ち明けたあとで黙りこんでしまったので、あわてて故郷の明るいエピソードで場を盛り上げようとした結果、普段の自分が出てしまったから。

イ 康太郎が被災者とのやり取りに緊張を覚えていると知り、あえて方言を交えてくれた調子で話すことによって、康太郎のその緊張をほぐしてあげたいと思ったから。

ウ 康太郎が自分の思いを率直に打ち明けてくれたので心を許し始め、生まれ育った故郷の思い出を話そうとするときに、方言を使っている康太郎に思わずつられてしまったから。

エ 康太郎が自分の生まれ育った地域の方言で突然弱気なところをさらけ出してきたので、武井も自分をつくるわずに普段の調子で康太郎のことをはげまそうと思ったから。

問九 —— 線部9「うん、いい顔だった。いい顔」とあるが、武井がそのときのばあさんの顔を「いい顔」だったと思うのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア それ以前からずっと気になっていたばあさんのすっぴんの顔を思わぬ偶然で見ることができ、その時のめったに見ることのできないものを見た驚きや喜びを今も思い出すことができるから。

イ 人前で絶対にすっぴんの顔を見せなかつたばあさんが思いがけない形で見せた眉のない素顔に、今となってはかえって当時のばあさんのこだわりが感じられ、そのことになつかしさを覚えるから。

ウ 美しくあることを心がけていつも厚めの化粧をしていたばあさんがたまたま見せたすっぴんの顔を見て、かえって化粧を落とした素顔の方が美しいと感じた印象が今でも鮮明によりがえってくるから。

エ 人前に出る時いつも化粧で素顔を隠していたばあさんが偶然見せたすっぴんの顔に、本来のばあさんの人の善さが表れていたような印象を受けたことが今でもなつかしく思い出されるから。

問十 —— 線部10「だからさ、なんていうか。町はあったんだよ」とあるが、ここでの武井の思いはどのようなものであると考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア この場所にも独特のこだわりや個性をもった魅力的な人々がたくさん暮らしていたのだということを楽しんでいる。エピソードによって語ることで、確かにあった「町」の魅力をもっと知って欲しいと思っている。

イ 火傷の跡を見るたびに思い出される個性的な人物との心温まるエピソードをそのとき負った傷が分かるように示しながら話すことで、それぞれ個性をもった人々の住む「町」の存在を信じて欲しいと思っている。

ウ 今でも容姿をはじめ細かな点まで思い出せる鮮明な記憶が自分にまだ残っていることを細部にこだわったエピソードで示すことで、「町」は今も自分の中に存在していることを分かってもらいたいと思っている。

エ それぞれ固有のプライドをもって生きていた人々の固有の生活がここには確かにあったということを具体的なエピソードとして語ることで、「町」を現実に存在したものとして感じてもらいたいと思っている。

問十一 —— 線部11「あの、また困ったら、呼んでください」と絞りだすように言う。「腰は強いほうなので」とあるが、康太郎はこの二つの発言を通じてどのような思いを伝えようとしているか。「絞りだすように」という表現にも注目しながら、九〇字以上、一一〇字以内で説明しなさい。ただし、次の語を必ず使うこと。

よそ者

二、次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私はかつて学者を目指して大学に進学した。その夢のために学部時代、1日1冊読むと決めて読書をしてきた。ブックオフで安く買った本や図書館で上限いっぱい借りた本を日々消化するように読み続けた。

だが、大学院に入ってそれはあまり意味がないと気づくようになった。なぜなら、筆者が記した言葉それ自体を味わうことよりも、いつの間にか読む量が目標となっていたからだ。1日1冊読むことが目的化してから、忙しくなると、挙げ句の果てに読みたい本ではなく1日で読める本を選択するようにすらなってしまった。

多読は決して悪いことではない。けれども、読書が量的な数値として認識されてしまうと、「終わり」が目標となり、それを基準に読書を進めてしまう。読書の本質は、読み終わることよりも、対話のプロセスにある。

若松英輔は、読むことにおいて速くできるようになることは、ほとんど意味がないという。むしろ時間をかけて「たしか」にできるようになることだけが大切で、「言葉は、多く読むことよりも、深く感じることに方に圧倒的な意味がある」と述べる。

途中で立ち止まっても、時間をかけても、繰り返し読んでもいい。大切なのは、量ではなく、言葉を媒介にした対話的コミュニケーションによって「深く」読むことなのだ。単なる「情報」ではなく、このように書物に触れ、味わう行為は、^aヒツゼンのに筆者への感度を高めることになる。それは他者への想像力をもつことにつながるだろう。

² その意味で読書は「旅」に似ている。「観光」とも「旅行」とも違う、旅程が明確に決まっていない「旅」。アメリカの歴史家ダニエル・J・ブーアスティンは、現代の旅行者は旅行先のイメージをあらかじめもっており、それを確認するために旅行する「観光客」だと看破した。

さらにこの20年のインターネットやスマートフォンの普及によって事前にたいいのことは調べられるようになり、無駄な時間、非効率なルート、偶然性は排除されるようになっていった。効率よく多くの観光地を巡る「ファスト旅行」のようなくすパ&タイバ重視の格安ツアーが競いあう。予測できないジタイに陥ることも、思いがけず人と交流することも少なくなかった。

どこに行くかよりもどう旅するか、早く目的地に行くよりも、いかに旅程を味わうか。このプロセスに偶然性を取り込むならば「旅」はより豊かなものになるだろう。目的地に早くたどり着く「観光客」ではなく、旅の過程を深く経験する「旅人」になること。未知なる世界に触れて、見知らぬ他者と遭遇すること、旅人は他なるものへと開かれてゆくだろう。

2010年代に動画配信サービスが普及して、大量にあるコンテンツを早送りで視聴する人がかなり増えると、タイパを重視する効率主義を問題視する声が大きくなった。2010年代末には、ダイジェストで効率よく映画の内容を把握できる「ファスト映画」も流行した。

資本主義を基盤とした消費社会、そして新自由主義化した社会は、私たちを焦らせて消費行動に駆り立てる。作品そのものを味わう以上に、人よりも多くの作品を見終わることが（無意識のうちに）目的化してしまう。だから現代社会に生きる人間は、もはや作品そのものを味わうのが困難になりつつある。

4 有名なルネ・ジラルルの「欲望の三角形」によれば、欲望は具体的な対象に向かうのではなく、他者の欲望の模倣であり、対象から欲望がもたらされるのではなく、他者の欲望を真似するから際限がない。ネオリベリズムと消費社会においては、こうした欲望のサイクルがいつそう加速する。

フランスの哲学者であるジャン・ボードリヤールは、生存するために必要なものを超えた余剰を享受する「浪費」を肯定し、20世紀以降に現れた新たな「消費」のシステムを真に豊かな社会とはいえないという。モノが溢れる消費社会では、それを所有することで他者と比較し、差異を意識するようになり、欠乏感と差異化への欲求を生じさせ、消費活動に駆り立てる。観念や記号を対象とする「消費」には終わりが無い。

早送りをして人よりも効率よく情報を取り入れたいという欲望のもとに行われる視聴は、作品それ自体を味わいつくす「浪費」的な視聴ではなく、「その作品を見た」と他者にいうため、SNSに投稿するため、あるいは流行に取り残されないようにしていくための終わりのない「消費」的な視聴である。

映画やドラマを早送りで観る、音楽のコンサートを飛ばしてサビだけ聴く、スポーツをダイジェストだけ観戦する、これらに見出されるのは「ファスト教養」にも通じる、タイパを重視した「消費」の視聴モードだ。

視聴者の望む状況や環境に適應できる「アダプタブル」な視聴をメディア技術は可能にした。他者との比較を回避できない新自由主義の価値観で動く社会において、テクノロジーの力でいったん効率を手にとると、それを手放すのは簡単ではない。

メディア技術は、その利便性によって無駄と思われるものを排除するように唆す。ユーザーの都合に合わせて作品を操作させ、利己的な視聴を助長する。コンテンツは人より早く得るべき「情報」に置き換えられ、「消費」の効率化が目指される。

タイパを重視した視聴行為は、作り手の営みをいっさい無視し、作品をコントロールして自らの欲求に見合うようにモノのかたちを思うがままに改変してしまう。こうした娯楽消費は、他者の創作物を支配する利己的な行為であり、そこに利他的な精神はまったく見られない。

動画配信サービスの視聴者には、自らの意のままに操作して、作り手が創り出した表現を味わうことなく、「情報」として他者よりも早く取り込もうとする受け手が多くいる。対して作り手は、語りのテンポをあげ、カット割りを速め、過剰に躍動的な映像で飛ばし見や早送りをさせないようにする。ここには作り手と受け手の「対話」は見出せない。あるのはお互いが他者を支配しようとする利己的な営みであろう。

私の研究室の「映画ゼミ」では、作品をみんなで観て、何が描かれているのか、どういう解釈が可能かをひたすら議論する。受験勉強のように「正解」があるわけではない。作り手の作品を「情報」として消費するのではなく、何度も観直して、いくつもの解釈を重ねる。それは作品を豊かにカクチョウすることであり、作り手の無意識を捉える試みでもある。

2010年代後半のトレンドとなった倍速視聴や早送りだが、90年代のビデオデッキにも早送りしながら音声が聞ける機器はあったし、DVD時代にも倍速視聴の機能は実装されているものが多かった。

ビデオデッキが家庭に普及していた1988年の言説に、テレビアニメをビデオに録画して、わざわざ倍速で観る子供がたくさんいるらしいというものがある。だが、その頃はさして社会問題化されなかった。室井尚はこの現象に対して当時このように論じていた。

倍速でみることによって情報はその姿を変えることになる。彼ら^{かれ}がもとめているのはこの情報の濃密化^{のうみつゝか}による変容であって、その通常の意味での味わいとか、ムードなどでもなければ、主体の鏡としての再現^{えん}＝表象が問題なのでもちろんない。スピードはただ単に効率とか時間のセツヤク^eにかかわるものではないのだ。そうではなく、この情報の密度の濃密化、その圧縮、その差異化そのものが一種の恍惚^{しやうつう}をもたらすのである。それは子供たちを通常の彼らではないものに変え、かれらの身体と世界とを一変させるのだ。

これはタイパ消費とは根本的に異なる見方である。効率や時短ではなく、テクノロジーによる変容に未知なる恍惚^がもたらされること。それが子供たちの身体と世界を一変させるというのである。

タイパ消費は作品を恣意的^{しいてき}に変え、自分に最適化させるため、自身が変わることはない。これは作り手に対する利己的な視聴である。それに対して、室井のいうような濃密化による視聴は、作品を別の仕方^{かた}で味わい直す行為であり、自らも変容することになる。

デジタル技術による管理の外部に立つことを意識的に実践^{じっせん}することによって、もっと日常にランダムネスや偶然性を組み込み、想定外の物事に自らが開かれていく回路を見出していくことが、いまどれほど必要とされているかは論を俟たない。利他^{りた}が、それぞれのポテンシャルを引き出しあって変容していくことならば、予測可能なものに効率よくアクセスするにとだけを目指さず、複数の別の回路とそれに反応するアンテナを張っておく必要があるだろう。

繰り返しになるが、インターネットやスマートフォンによる情報へのアクセスは、^⑧アルゴリズムによって見たい情報ばかりに行き着いてしまう。「フィルターバブル」^⑨の効果で、個人の検索／クリック履歴^{りれき}によってユーザーの好む情報^fがユウセ^ン的に表示される。それによって利用者の趣味嗜好^{しゆみしこう}に合わない情報から隔絶^{かくぜつ}した情報環境に身を置くことになる。

その点から考えると、たとえば、情報にアクセスする際に新聞⁸はとても重要なオルドメディアだ。普段接することのない情報が大量に入ってきて触発^{しよくはつ}されることがあるかもしれない。いつもは考えないことに思考が転じる契機^{けいき}が訪れる。

日常生活では想像することもない他者に出会う。他者の生を考える回路を作り出す。こうしたきっかけはアナログメディア

アを意識的に取り込むこと、すなわち環境を作り替えることで生じる。これは子供たちが、予測できない遭遇に満ちた自然のなかで遊ぶこととも通ずる。

これまであつかってきた遊び／学びの場と娯楽の環境に共通していえることは、目的化（目標や終わりの設定）と効率化（無駄なく最短ルートでたどり着くこと）、そして技術による管理化（デジタル技術だけを意味するのではなく、広く環境管理する方法）である。

利便性の高いテクノロジーにより人間が介在しなくてよい管理システムの存在。不快な過程や無駄なやり取り、すなわち途中のプロセスを味わうことを拒む傾向の前景化。社会がこうした方向に突き進んでゆけば、私たちはますます他者を想像する力や他者と協働する力を失っていくだろう。

意識を変えるのは難しいが、テクノロジーの配置⁹ 配列を組み合わせることはできなくはない。身近にあるモノやスペース、技術や環境をアレンジすることで、日常空間にランダムネスや偶然性を組み込むことが重要なのである。

（北村匡平『遊びと利他』）

⑨ アダプタブル：適応できると同じ意味。

アルゴリズム：ここでは、利用者に合わせて情報を選択し、並べ替えるインターネットの仕組みのこと。

フィルターバブル：インターネット上で、利用者が自分の好みや興味関心に合った情報ばかりに囲まれてしまう現象。

問一 〜〜線部 a ~ f のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ——線部 1 「読書の本質は、読み終わることよりも、対話のプロセスにある」とあるが、どういうことか。次のことから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 本を読むときには、文字を読むよりも筆者と対話的コミュニケーションをとろうとする過程が重要だということ。
- イ 読書する過程では、速く読み終えることよりも本と対話しながらゆっくり時間をかけて読むことが重要だということ。
- ウ 読書においては、量を読むことよりもそこに書かれた言葉と対話し深く味わって読む過程が大切だということ。
- エ 本を読む過程では、正確に読むことよりも本と対話し想像力を働かせ多様な意味を読み取ることが大切だということ。

問三 ——線部 2 「その意味で読書は『旅』に似ている」とあるが、筆者は「旅」のたとえを使ってどのような「読書」を読者にすすめているか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア あらかじめ調べて知っているものを効率よく見て回る「観光」のように情報の確認だけを目的とするのではなく、意外な出来事や人との偶然の出会いを求めて無計画に行く「旅」のように、本の中で意外な出来事を楽しむような読書。
- イ 下調べですでに知っている目的地向かう「観光」のようなものではなく、知らなかった世界や未知の人々との出会いを通して新たな発見の興奮や喜びを味わう「旅」のように、他なるものとの遭遇を通して刺激^{しげき}を味わうような読書。
- ウ 「観光」のように目的地向かう途中のプロセスを楽しむのではなく、目的地にある未だ見ぬ世界との出会いやそこに暮らす未知の人々との交流を深く味わう「旅」のように、作品を通して筆者への理解を深めていくような読書。
- エ 効率重視の「観光」のように円滑^{えんかつ}な情報収集を求めるのではなく、その過程で遭遇した世界や人との交流を味わい自分の外にあるものを深く感じ受け止める「旅」のように、他者への理解を深めて自分が開かれていくような読書。

問四 —— 線部3「現代社会に生きる人間は、もはや作品そのものを味わうのが困難になりつつある」とあるが、なぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他者よりたくさんのモノを所有することが目的化し、一つ一つのモノを大切に扱^{あつか}う姿勢が薄^{うす}れつつある現代社会では、一つ一つの作品をゆつくり味わうのではなく、多くの作品を視聴することが目的化しているから。

イ 人が自分と他者とを常に比較し、他者よりも多くのモノを所有したいという願いが消費活動を加速させる現代社会では、他者よりも効率的に情報を取り入れたいという欲望のもとで作品が視聴されることになるから。

ウ 他者の欲望を真似ることによって人々が効率的にモノを消費しようとしている現代の消費社会においては、他者の欲望を真似ることによって作品を視聴する際にも、より効率よく作品を視聴しようとしてしまうから。

エ 他者と違う自分でありたいという思いが消費活動を支える現代の社会においては、「その作品を見た」と他者にいうためや、SNSに投稿して他者と違う自分をアピールするために作品を視聴することになるから。

問五 —— 線部4「有名なルネ・ジラルルの（ ）際限がない」とあるが、このルネ・ジラルルの理論にそって考えるとすると、仮に自分が「あるシャーペン」を欲しいと思ったとしたら、そのときどのようなことが起こっていると考えられるか。そのときの自分の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周りの人とは関係なく自分と「あるシャーペン」との対一の閉じられた関係の中でその「あるシャーペン」が良いと感じられてきている。

イ 自分はその「あるシャーペン」を良いとは思わないが周りの人たちに合わせてその「あるシャーペン」が良いと思っているふりをしている。

ウ 周りの人がその「あるシャーペン」を良いと言っている事実を根拠にその「あるシャーペン」は良いものであるに違いないと判断している。

エ その「あるシャーペン」を良いと言っている周りの人の影^{えい}響^{きやう}を受けて自分もその「あるシャーペン」が良いと思えるようになってきている。

問六 —— 線部5「こうした娯楽消費は、他者の創作物を支配する利己的な行為」とあるが、なぜ「他者の創作物を支配する利己的な行為」と言えるのか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 作り手が創り出した表現には深く向き合わずに、自分の都合に合わせて作品を思い通りに操作して視聴しているから。
- イ 作品の無駄だと思われる部分を作り手の営み（こころよ）を無視して排除し、作り手の無意識を捉えるために視聴しているから。
- ウ 作り手が作品にかけた労力をいっさい考慮せず、自分の意のままに作品の内容そのものを変更（へんこう）して視聴しているから。
- エ 作品を多様に解釈しようとするのではなく、自分の好きなように解釈したいという欲望のもとに視聴しているから。

問七 —— 線部6「利他的な精神はまったく見られない」とあるが、作品の作り手と受け手との間に「利他的な精神」が見られる関係とは、どのような関係だと考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 作り手の思いを受け手が誠実に受け止める姿勢を示すことで、作り手がより良い作品を創り出していけるような関係。
- イ 作り手と受け手が互いを尊重し「対話」することによって、互いの可能性を引き出し合い変わっていくような関係。
- ウ 作り手の表現の解釈を通じて受け手が作り手の無意識に触れることで、作品の世界がより広がっていくような関係。
- エ 作り手が創り出した作品の表現を受け手が味わいつくすことで、受け手の人生がより豊かになっていくような関係。

問八 —— 線部7「だが、その頃はさして社会問題化されなかった」とあるが、かつてのビデオデッキによる倍速視聴が、現在の倍速視聴と違って問題にならなかったのは、なぜだと考えられるか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の操作で映像が倍速になること自体に未知の感動があり、技術の進歩を実感できるような機会となったから。
- イ 早送りによって作品が表現する情報が姿を変え、その影響で自分のまわりの世界も姿を変えたように感じられたから。
- ウ 倍速視聴することで作品の新たな魅力に気づき心が動かされ、自分や自分の世界の見方が変わることがあったから。
- エ 早送りして視聴することで作品の内容がより濃いものになり、今までになかったようなおもしろさが生まれたから。

問九 — 線部 8 「新聞はとても重要なオールドメディアだ」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア アルゴリズムによってユーザーの好みに合った情報だけを届けるインターネットと比較して、新聞は大量の情報を伝達することを得意とするメディアであるから。

イ インターネットで出回っている情報は、ユーザーが見たくなるよう脚色きゃくしやくされており信頼しんらいすることができないが、新聞は取材もとに基づいた正確な情報を伝えてくれるから。

ウ 自分の好みについてのデータが管理され、趣味嗜好に合う情報にばかり誘導ゆうどうされるインターネットと違い、新聞では自分がいつもは目にしない情報に触れられるから。

エ 自分が見たい情報に効率よくアクセスするためにインターネットを使用することは利己的だが、新聞を読むことは書き手との「対話」であり、利他的だと言えるから。

問十 — 線部 9 「日常空間にランダムネスや偶然性を組み込むことが重要なのである」とあるが、なぜ重要だと考えられるか。私たちが生きる社会がどのような社会であるかに触れ、本文全体の内容をふまえて、一〇〇字以上、一二〇字以内で説明しなさい。ただし、次の二語を必ず使うこと。

偶然性 ・ 未知

